

産地、今(3)

リ レ ー 随 筆

北海道の米産地だより

(北海道立中央農業試験場技術普及部
主任専門技術員 田中^{たなか}文夫^{ふみお})

The Introduction of Rice Producing Area in Hokkaido.
By Fumio TANAKA

(キーワード：産地だより，北海道)



空知地方の水田風景

今、北海道産米の評価が高まっている。

本道の水稲栽培面積は 2001 (平成 13) 年現在、約 122,000 ha で、1969 年に記録した最高面積 266,200 ha には遠く及ばないが、ご存じのように日本一の生産県である。

地帯別には石狩川沿いに石狩平野と上川盆地をつないで南北に伸びる空知地方、水の都・旭川市を中心とした上川地方、石狩平野を擁する石狩地方、日本海側の北部に広がる留萌地方、広大な牧場を有する日高・胆振地方、本州の里山をイメージさせる後志以南の道南地方などが主要な米どころであり、いずれも特色のある特有の稲作風景が広がる。さらに、その北縁に沿って網走、道北などのもち米産地が位置している。

1 主産地の特徴と北海道米の現状

最初に栽培の古い順に各主産地の特徴を概略したい。まず、道南地方は最も栽培の歴史が古く、1685 (貞享 2) 年に亀田郡文月村 (現 大野町文月) で高田吉右衛門が開田したのが嚆矢とされる。この地帯は温暖な気候が特徴であるが、海洋の影響で夏期も内陸ほど高温にはならないことが多い。多くの生産者は野菜との複合経営を展開している。

石狩地方は後ほど述べる留萌地方と同様に 1858 (安政 5) 年頃には造田がなされたとされる。この地帯は石狩川の下流に位置し、豊富な水資源を有するが、泥炭地を多く抱えている。

留萌地方は海岸に面しており、夏は高温になるが、初期生育が比較的遅延しやすい地帯である。近年、この点を克服する努力が実を結んで高品質米の生産が多い地域と位置づけられている。

日高・胆振地方は 1880 (明治 20) 年代には栽培面積が増加していたとされるが、夏期に太平洋の海霧の影響を受けやすい地帯である。

上川地方の栽培の歴史は比較的新しく、1891 (明治 24) 年に旭川での開田が最初とされる。上川盆地を中心とした夏期の高温、豊富な水資源に恵まれ、道内屈指の良質米産地となっている。

空知地方は 1892 (明治 25) 年の開田が最初とされるが、現在は道内で最大の米どころである。一戸当たりの栽培面積が大きいことが特徴である。自然環境は一樣ではなく、強風地帯や泥炭地を抱えている。

1988 年に奨励品種となった「きらら 397」は、収量性を追求する本道の稲作に終止符を打ち、同時に「まずい米」の代表と言われた道産米もついに他府県並みの食味に達したことを道内外に告げた。その後は、急激に栽培面積を拡大し、道産米の評価を高めた。加えて、1996 年にさらに良食味の品種「ほしのゆめ」の登場とともに、本道稲作も安定期に入ったかに思えたが、1997 年の急激な価格低下によって、生産者は稲作経営の将来が見えない深刻な事態に追い込まれた。

しかしながら、関係者の努力が徐々に効を奏して、「安い」、「おいしい」道産米の評価が定着し、2000 年



生産者を対象としたカメムシ類すくい取りの指導

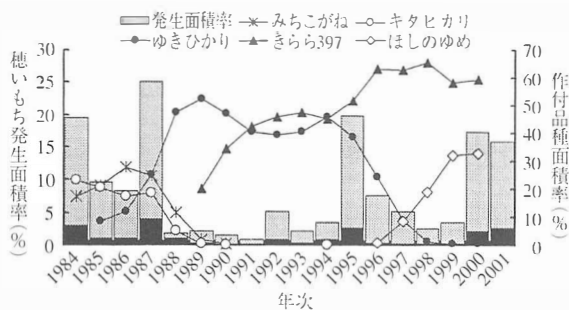


図-1 穂いもちの発生面積率と作付け品種の推移

度米では入札価格も 60 kg 当たり 15,000 円台を取り戻した。また、冷害基調だった 2001 年も平年作でその価格を維持したことから、関係者一同は胸をなでおろした。

冒頭の文章を裏付けの一例として、道内で消費される米のうち、道産米が占める割合が、2001 年米穀年度は、過去最高の 60% に達した (2001 年 12 月 20 日付、北海道新聞) ことを紹介したい。

さらに、米年度は良食味に収量性を兼ね備えた期待の新品種「ななつぼし」が登場して実需の評価を待つこととなり、明るい話題が加わった。

一方、トピック的には酒米の新品種「初雫」(元 農水省北海道農試・現 北海道農業研究センター育成・平成 9 年度奨励品種)、「吟風」(北海道立中央農試育成・平成 11 年度奨励品種) の評価が高まっている。「すっきりした味わいに仕上がる」と好評である。

2 病虫害防除推進上の課題

話題を病虫害防除に移して、今日的ないくつかの課題を紹介したい。

一つは近年のいもち病の多発である。「きらら 397」は抵抗性遺伝子「*Pi-i*、*Pi-k*」を、「ほしのゆめ」は同「*Pi-a*、*Pi-i*、*Pi-k*」を有するが、「きらら 397」の栽培面積拡大に伴って主要レースの変遷が劇的に進行し、2001 年はいずれの品種も侵すレース 037 のみが検出される事態に至っている (独行人・東北農研センター調べ)。品種構成も 2001 年は穂いもち抵抗性中～やや弱の「きらら 397」が 59%、同やや弱の「ほしのゆめ」が 26% を占めており、気象条件以外の多発要因は整っていることが懸念されてきた。その心配が的中し、2000、01 年と連続して全道的な多発生を見た (図-1)。

特に 2001 年は、7 月下旬の低温による出穂の極端なばらつきが防除時期の見極めを困難にさせ、穂いもちの被害が地域によっては顕在化した。今後の反省材料である。また、保菌種子やハウス周辺の穀殻使用に

伴う早期多発の事例が見られ、感染源密度の低下が今後の課題である。

害虫では全国的な問題となっているアカヒゲホソミドリカスミカメの多発生がある。残念ながら 1999 年には産米に斑点米が多発し、高品質米生産の気運に水を差したことは記憶に新しい。その反省から、後述するように各地ですくい取りによる発生予察体制の整備と情報伝達の効率化が急がれている。さらに、転作に伴うコムギの栽培面積増加による生息環境の拡大、地上防除の方法の検討などの早期解決を要する課題を抱えている。

3 北海道米の将来展望

ところで、北海道では「クリーン農業」の取り組みを強化している。その一環として、「北のクリーン農産物」表示制度 [YES! clean] の事業がある。それは農業試験場等が開発した技術を用いて減農薬・減化学肥料栽培を実現した生産集団を認証し、その農産物を消費地に積極的に PR していく仕組みである。これは本道独自の表示制度である。

この事業は 1999 年から開始され、2001 年現在で 91 集団が登録されるに至っているが、その中で米に関する認証が 18 集団に及ぶ。いずれも、土壌診断と堆肥施用などの土づくりによる減化学肥料、発生予察の徹底による減農薬栽培が中核技術となっている。「安心」を消費者に届ける第一歩としての [YES! clean] 認証が主産地を中心に平準化されることが予想される。そのために病虫害分野においてはいつその高精度発生予察技術の開発が強く望まれている。

このように、薄日が差し始めた本道稲作であるが、依然として予断を許さぬ将来像に変わりはないというのが関係者の共通認識である。今、「売れる米づくり」を目指して、主産地では様々な取り組みが強化されている。

栽培面では成苗化の促進、土壌診断と側条施肥による吸収窒素量の制御ならびにリモートセンシングによる啓蒙、ケイ酸質資材の施用促進など、米粒の低タンパク化を実現するための技術が定着しつつある。さらに貯蔵流通に関しても雪中貯蔵、ライスターミナルへの粗バラ出荷などによる品質維持の取り組みが各地で行われている。

本年で 27 年目となる農水省「米のガイドライン」が 9 月に示された。それを受けて、本道での 2002 年に向けた市町村の生産数量目標が設定され、各主産地では今後も生き残りを賭けた真剣な努力が続けられる。

明るい話題が聞こえ始めたこの頃、我々は北海道米の動向からしばらく目が離せない。